

## 「本物」との触れ合い

スコット・ショウ

2011年6月20日

吉村順邦翻訳

九州北部の田園地帯にある小さな教会で、オルガンリサイタルを開いたことがある。リハーサルのため教会を訪れてみると、バルコニーには立派なオルガンが備わり、窓はステンドグラスで飾られ、鐘楼には本物の鐘が吊されていた。すばらしいですね、と教会オルガニストに言葉をかけた筆者は、彼女の説明を聞いてさらに感銘を受けた。この教会では幼稚園も併設しているので、子どもたちになるべく「本物」を体験させることが大切、と考えているようだ。オルガンならスピーカーではなく金属や木製のパイプから響いてくる音を、ステンドグラスは芸術的にデザインされた本物のガラス細工を、そして幼稚園の始業と終業を告げる鐘もスピーカーではなく本物の鐘を体験してほしい。そうした思いから教会をこのような造りにしたのだという。予算との兼ね合いもあるだろうが、こうした姿勢は私たち自身も見習うべきではないだろうか。

これと似た理由から、筆者は立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊と立教大学オーガニスト・ギルドの英国研修ツアーを隔年で企画しており、最近では2011年2月から2週間にわたってこれを実施した。これら2つの学生団体は、大学チャペルで毎日ないし毎週行われる礼拝で音楽を演奏している。したがって、彼らが数年ごとにそうした音楽や礼拝の発祥の地で本流に接することには大きな意義がある。聖公会の本拠地であるイギリスを訪れることにより、作曲時に意図されたとおりの音響空間で教会音楽を聴くことができるからだ。もちろん、練習する曲の演奏は皆も録音では聴いているものの、礼拝で接する生の歌唱や演奏とは比べものにならない。それは「人工物」（録音）と「本物」（由緒ある場所で生演奏される音楽）との違い、とってよいかもしい。

先般のツアーでは、学生たちは数多くの夕の礼拝と2度の日曜礼拝に参加したほか、オプションのコンサートにも足を運んだ。こうした演奏に五感で触れたことで、彼らは何を学び取っただろうか。おそらく最も大きかったのは、音楽を礼拝の一部として位置づけることができた点であろう。今回は数あるマニフィカトの中の1つを聴いた

が、この曲を単に魅力的な音楽としてではなく、伝統に則った夕の礼拝において2度も生で聴く機会があった。1度目はケンブリッジの小さな大学チャペルでロウソクの光に包まれながら、そして2度目はウェストミンスター寺院の壮麗な夕の礼拝での演奏だった。学生たちはこの2回の演奏から、a) 自分たちが歌う音楽には歴史上・礼拝上の意味合いがあること、b) 絶対的にこうあるべきだ、という演奏形態はなく、小規模なチャペルでも大聖堂でも音楽はよく機能し得ること、そして、c) 曲の歌い手は生きた人間であること、を実感できたはずだ。

筆者自身が今回の研修旅行で最も興味深いと感じたのは、ケンブリッジのホテルでの勉強会だった。学生たちはいくつかのグループに分かれ、研修旅行で聴いた音楽について発表し合った。中でも話題に上ったのは、その直前に学生たちが1日を過ごしたイーリー・カテドラルでの演奏だった。その日は朝の聖餐式と夕の礼拝に参加したが、聖歌隊の出来は朝夕でばらつきがあり、夕の礼拝での難しいアンセムはややあらが目立った。有名な大聖堂の聖歌隊でもこのように調子の悪い時があることに学生たちは驚き、ショックすら受けたようだった。それも無理はない。「人工的」な演奏（不都合な箇所を編集で削除して完ぺきに仕上げた録音）だけを聴いていると、イギリスの聖歌隊はみな超人的な歌手ぞろいで、他のグループはとうてい足下にも及ばないように思ってしまうからだ。しかし、「本物」の演奏には好不調もつきものだ。立教の聖歌隊メンバーも、そのことを知って多少勇気づけられたのではないだろうか。この日の経験から彼らが学んだもう1つのポイントは、歴史ある聖歌隊というのは演奏団体ではなく、礼拝に奉仕しこれを賛美する目的で制定された機構である、という点だ。一千年も前からある建物で、数世紀の歴史を持つ聖歌隊が歌う伝統的な礼拝のドラマを体験すると、さまざまな思いが頭をよぎる。研修旅行に参加する学生たちは、自分自身もこの大河のような宗教音楽の流れを担う一員であることに気づくに違いない。研修旅行を終えて帰国する学生たちは、誰もが活気にあふれた様子で平常の生活に戻っていく。ただ言葉で説明して激励しただけでは、とうていこれほどの熱意をかき立てることはできないだろう。日本の他の聖歌隊の方々にも、少なくとも一生に一度はこうした海外研修への参加をお勧めしたい、と思うほどである。